



撮影：脇田友

『風景によせて 2021 はらいずみ もやい』 レポート

目次

1. ご挨拶
2. 『はらいずみ もやい』を構成するもの
3. 『はらいずみ もやい』ができるまで
4. ショップ
5. 「ふとフォト」の変遷
6. アーカイブと「プロセス便」
7. ソノノチ展『風景によせて 2021 えんをめぐる』
8. 【劇評】「風景」と「観客」について
——ソノノチ『風景によせて 2021 はらいずみ もやい』評（森山直人）
9. 上演記録
10. 『風景演劇』プロジェクトとは
11. ソノノチとは

1. ご挨拶

『風景によせて 2021 はらいずみ もやい』は「風景演劇」の取り組みをはじめから3年目の作品です。この間さまざまな場所に足を運び、風景というとても大きなものと、どのように向き合うかを考えてきました。

本プロジェクトの37日間の滞在制作のあいだも、リサーチ、打ち合わせ、稽古と膨大な時間を積み上げながらチームで試行錯誤を重ねてきました。そんな中、くり返し私たちが悩ませたのが「集まらないといけない、でも集まれない」という事実でした。コロナ禍において創作を続けていくこと、それも創作の拠点を離れ15人もの大人数で、対面することが不可欠であるパフォーマンスをつくるということ、今思い出しても、とても一筋縄ではいかない日々でした。

その過程でキーワードとして浮かび上がってきたのが、タイトルにもある「もやい」という言葉です。これは船と船をつなぎあわせるという意味が転じて、「共同でひとつのことをする・ひとつのものを共有する」という意味を持つようになったといいます。見える範囲のものすべてがこの場所に居合せ、人は大地をもやい、自然の気配とそこにしかないひとときの風を共に感じ、見えたものの手触りをそっと持ち帰る。こんな時代だからこそ、私たちの作品のフレームは「これからの集いの場」を作れるのではないかと考えたことを考えながら、今に至ります。

『はらいずみ もやい』はおかげさまで多くの方のご協力や応援をいただき、これまでの作品にはなかった新たな挑戦もしています。他の専門性を持つアーティストとの協働、創作プロセスのアーカイブの記録と「プロセス便」の制作、そして、それまでの過程をその変遷ごと作品化したソノノチ展『えんをめぐる』の開催など。上演が終わった後も、上演会場を離れた後も、私たちのもやいの軌跡を通じ、私たち一人一人が描き出す風景と出会う機会を届けられれば・・・本報告書もその助けとなれば幸いです。

まだ見ぬ風景によせて。

ソノノチ 中谷和代

2. 『はらいずみ もやい』を構成するもの

▼サウンド



今回の創作や演奏においては、和代さんと会話を進める中で耳にした、風景≠景色という点に大きく感化されました。風景と景色はことなるということ、景色はいつだってそこにあるが風景にはかならず眺める主体がそこに在るということ。そういった意識が、今回の創作プロセスの起点になったと思います。

風景の演劇にのせる音楽をつくる。今作の音楽への取り組みを言葉でこのように定義することは、ややもすると主観を脇にやって環境や土地に溶け込み一体となるような音楽をつくる、という捉え方になりがちです。しかし、先述の起点をよりどころにした結果、今作の音楽はこれまでのソノノチで書き下ろしてきたものの中でも特に身体を感じるような——つまりはそこに誰かがいるから鳴り響くような——音楽になりました。

ただしこの音楽はその特徴ゆえに役者や作品を置いて一人歩きしかねない危険もはらんでいます。そのため今作では、予め作成したフレーズや音の素材を、演奏とは独立して、観客周囲に配した数点のスピーカーから再生することも行いました。結果、①土地に住う生物や自然の環境音というレイヤー／②演奏と環境音を結ぶ音素材のレイヤー／③その時その場で演奏する音楽のレイヤー、という3つのレイヤーで音空間を構築する試みをしています。

以上の向き合い方や試みにより、今作の音楽は成り立っています。今作が観客の席の位置や時間帯といった様々な要素で作品の捉え方が変化するように、今作の音楽もまた、観客の位置や上演の回ごとに先に挙げた3つのレイヤーの距離や重なり方が変化していきます。このことは上演の一回性を高めたと思います。そして僕自身、足を運び上演に立ち会うことの繊細さ、難しさ、面白さを改めて当地で実感しました。「風景演劇」というこの取り組みには、まだまだ可能性を感じていますし、今後さらにまた深化していくことを願ってやみません。

(瀬乃一郎)

▼美術



初めてソノノチの役者の稽古を見学させてもらい、印象的だったのは原泉の広大な風景に対する彼らのあえかな姿でした。風景は大地によって規定され、そこに棲む私たちの活動（今回の公演も）はほんの些細なものにすぎません。そこでその姿を観客の皆さんに、ささやかだけど、とても大きな変化を感じ取って欲しいと思い、会場に添えるようなかたちで客席を設計させていただきました。

鑑賞場所はパフォーマンスに近い場所から川を挟んだ向かい岸、商店に近い場所に点在させることで、みる人が自由に好きなところで見れるように視点を設けました。

丸太にロープの取手を付けることで、移動が可能なスツールや、みる視点が低くなるような筏的な床をつくることで大地との接点を図りました。

また、客席につかった資材のほとんどは原泉にあるもので構成されています。使われなくなった民家の廃材を住民の方からいただいたり、森林組合さんに丸太を加工していただいたりと地域の方々のご協力があったのが生まれたパフォーマンス作品となりました。

（下寺孝典（TAIYA）、藏園悠介）

▼衣装



上演空間の今回の衣装への影響について。キーワードは「風」でした。左右に木々山々があり、その間に広がる原っぱがあり、原っぱの横を流れる川があり……風を感じられる要素がたくさんありました。その風とどう共存するか、活かせるか？を考えながら衣装を作りました。

また、パフォーマー一人ひとりの身体性を活かすための工夫として、佇まいの雰囲気、身体の使い方（体軸、手足や肩甲骨あたりの動かし方の癖）を観察しました。特に今回は3人とパフォーマーが少ないので、その人のもつ独特な雰囲気・キャラクター性が反映させられるように意識しました。（藤原さんは少女っぽさや柔らかい雰囲気、芦谷さんは賢者や僧侶っぽい確固たる静けさを持っている、岡田さんはアクティブが似合う、など）

衣装を制作してみて、客席（視点）によって、天気によって、時間によって、全く見え方が違うというのが物凄く難しく面白い点でした。

（たかつかな）

▼ペインティング



私は今回、10月の滞在に参加しました。

まず、風景の大きさに驚きました。

普段は資料写真を元に屋内で絵を仕上げているので、巨大な風景の真ん中で絵を仕上げているのは貴重な体験でした。

キャンバスにとても収まらないし、描ききれないなあという気持ちと共に、焦りながら絵と向かい合う感じでした。

とはいえ、普段通りの動作を心がけて取り組みました。制作できる時間が決まっていたので、いつもと違うことをしてもつまずくだろうと思ったからです。

普段通りを心がけて制作を進めていると、ふと落ち着いたり、集中している時間もでき、そんな時、たまたま演じ手の皆さんの動きとうまく噛み合った瞬間もあり、偶然ですが嬉しかったです。

今回は残念ながら制作のみの参加になってしまいましたが、もし、いつか機会をいただけたら、演奏家や演じ手の皆さんと、さらに一体感のある絵画制作について、考えたいと思います。

大自然の中で、大自然の色や形をキャンバスに描きとめていくのは楽しかったです。ありがとうございました。

(森岡りえ子)

3. 『はらいずみ もやい』 ができるまで

▼会場について

『はらいずみ もやい』は掛川市原泉地区の黒俣（通称:泉）地区の公会堂前付近で行われた。土地をよく知る人にはこの公会堂がかつて寺であった名残で「門前」と呼ばれる場所である。

そこにはまわりを山に囲まれ、時間帯によっては山の大きな影が横切る休耕田があり、パフォー



ーマンスはこの空間を中心に構成された。原泉を貫く原野谷川はこの空間の横を、集落の奥へとつながる道路と平行に流れている。雨が降ると霧が立ち込め、晴れると山の間からすっきりと空がひらけ日光が眩しい。

▼創作スケジュール（2021年）

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
原泉アートプロジェクト ディレクターとのオンラインセッション（隔週ペース）	■	■	■	■	■	■	■
滞在制作：4～13日間ずつ、合計37日間	■		■		■	■	
京都での稽古・ミーティング		■	■	■	■	■	
全クリエイションメンバー顔合わせ		■					
上演会場（泉公会堂付近）決定			■				
会場整備、舞台美術の製作・設置					■	■	
「原泉アートデイズ！2021」会期 『はらいずみ もやい』上演：11月20・21日					■	■	■
ソノチ展『風景によせて2021 えんをめぐる』準備 会期：12月25～26日						■	■

▼滞在生活について：滞在场所と1日のスケジュール



「原泉アートデイズ！」参加初年度にも滞在・制作を行った居尻レジデンスに滞在した。レジデンスから上演会場へは車で15分程度の距離があり、毎日数回車で往復しながら創作と生活の場を行き来した。一日の流れは限られた時間を有効に使うため規則正しく整理されていて、午前と午後のクリエイションを行うこと、夜に振り返りを行うことは滞在期間中一貫していた。終盤に近づくほど全体的な確認やアイデア出しの時間は減り、各部署内、および部署間の具体的な調整が行われるようになる傾向にあった。

【6月の滞在スケジュール例】

9:00 洗濯①、各自朝食
10:30 会場で試作、アイデア出し
12:00 レジデンスに戻る
12:20 振り返り
12:50 昼食
13:00 洗濯②
15:00 会場候補にてアイデア出し
16:30 レジデンスに戻る
16:40 振り返り
17:50 お風呂（ならここの湯）
19:00 夕食→各自作業
22:00 明日の確認ミーティング

【10月の滞在スケジュール例】

9:00 洗濯①、各自朝食
10:00 会場で稽古：昨日の問題点の修正、
パフォーマー動線・段取り確認
12:00 レジデンスに戻る
12:30 昼食、洗濯②
14:00 美術ミーティング（演出部、美術部）：
美術の素材探し、実験
身体トレーニング（パフォーマー）
17:30 レジデンスに戻る
18:00 お風呂（ならここの湯）
20:00 夕食
21:00 明日の確認ミーティング
洗濯③

4. ショップ

ソノノチは物販部「ソノノチノチ」として公演ごとにオリジナルグッズの製作を行っている。

『はらいずみ もやい』に合わせては次のグッズが制作された。



【プロセス便】

創作プロセス映像、本番上演映像、特典文書からなる、『はらいずみ もやい』の創作プロセスを追体験するためのアーカイブセット。



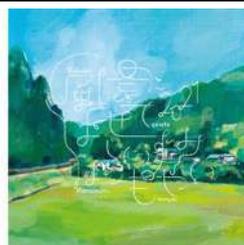
【風景便】

昨年から制作している、風景を見るのを楽しむためのグッズ「ふとフォト」の最新版と上演会場となる風景からインスピレーションを受け、製作したサウンドスケッチのセット。



【ファブリックポスター】

『はらいずみ もやい』メインビジュアルを使用した布製ポスター。壁に飾るほか、ハンカチーフやミニふろしきとしても使用可能。



【トレーナー】

『はらいずみ もやい』のメインビジュアルを胸元にあしらったトレーナー。屋外での上演にも対応できるよう、厚手の生地になっている。



【風景を着る T シャツ 2021.10.09】

クリエイションメンバーが上演会場で共同製作した、一点もの T シャツ。各人が筆を入れることで視点が交錯する風景という場の特徴を表現している。



【持ち歩ける風景画ブローチ】

森岡りえ子×ソノノチコラボ商品として製作された「小人サイズの風景画」。上演場所の泉の風景を小さなキャンバスに描いた作品。



5. 「ふとフォト」の変遷

「ふとフォト」は『風景によせて 2020-2021』から製作されている、風景を視覚的に切り取るためのカード状のオブジェクト、および上演・展示にあわせて実施した「ふと立ち止まって写真を撮る」参加型企画の総称である。

オブジェクトの形状は『はらいずみ もやい』時点で二種類存在する。一つは『風景によせて 2020-2021』における 15mm 角の窓がついた名刺サイズの紙製カード（画像 1）であり、もう一つが今回『はらいずみ もやい』におけるパフォーマーのプリントがなされた透明プラスチックカード（画像 2）である。両カードを使って観客はオンライン企画に参加することができる。内容はカメラの画角の中に配置し、そのカードを通して撮った写真をハッシュタグ [#ふとフォト] をつけて SNS でシェアしてもらおう、というものである。また、このカード越しにパフォーマンスを鑑賞することも想定されている。

「ふとフォト」に共通するコンセプトは「同じものを見ても、人によってその切り取り方が様々であること」を可視化することである。ふと足を止め、風景を眺める（その人だけの風景を構築する）とき、その経験はあくまで個人的な水準でとどまることが多い。風景を共通のフレームを使って切り取るというステップを踏むことで、他者との風景の切り取り方の違いが視覚的に感じられる。多様な感覚の偏在に気づくことで風景の一部となるという『風景演劇』のコンセプトを別の方法で表現したのが「ふとフォト」である。



画像 1：
昨年度（2020 年）の「ふとフォト」



画像 2：
『はらいずみ もやい』の「ふとフォト」

6. アーカイブと「プロセス便」

ソノチでは『風景演劇プロジェクト』と並行して創作プロセスのアーカイブにも積極的に取り組んでいる。昨年度『風景によせて 2020-2021』のプロセスは「つくる・くらす・あそぶ アーカイブ」カード集（画像1）および創作プロセス／上演映像としてすでに作品化されている。

今年度『はらいずみ もやい』ではアーカイブ専用スタッフを配置し、「『風景によせて 2021 はらいずみ もやい』プロセス便」の名を冠してこの創作プロセスを作品化したほか、後述の「ソノチ展『風景によせて 2021 えんをめぐる』」を開催し、アーカイブを多角的に体験できる環境を充実させている。「プロセス便」はストリーミング映像（プロセス映像／本番上演映像）と創作プロセスにまつわるデジタル文書のセットであり、随時予約販売を行っている（QRコード）。



画像1：
アーカイブカード集



画像2：
アーカイブ撮影の様子



『プロセス便』販売ページ

7. ソノチ展『風景によせて 2021 えんをめぐる』



日時：2021年12月25日（土）・26日（日） 各日 11:00–18:00

会場：KAICA/AKIKAN（京都市下京区岩戸山町 440 番地 江村ビル 2F・3F）

『風景によせて 2021 はらいずみ もやい』の創作プロセスにまつわる展示。全二日間開催。全 37 日間の滞在制作の過程で生じたアイデアやイマジネーションを再構築するというコンセプトで開催された。クリエイションの過程で蓄積されたさまざまな文書、写真、映像、および実際に使用した衣装、絵画、舞台美術といったオブジェクトが展示された。2F KAICA では体感型の展示、3F AKIKAN では資料展示を主に行った。



画像 1：
2F の展示の様子



画像 2：
3F の展示の様子

8. 【劇評】 「風景」と「観客」について

——ソノノチ『風景によせて 2021 はらいずみ もやい』評

森山 直人（演劇批評家）

「風景演劇」シリーズを制作しつづけているパフォーミングアートグループ「ソノノチ」の新作を、静岡県掛川市原泉（はらいずみ）地区で見た。初めて訪れる場所である。新幹線に乗り、掛川駅で降り、初めて乗るバスを駅前で待っているあたりから、すでに私は、半分「観客」であった。

同じような感覚を抱いたことは、いまは解散してしまった劇団維新派の公演で体験したことがある。たとえば、岡山県犬島で上演された作品を見に、電車を乗り継ぎ、フェリーに揺られる頃には——つまり、劇場の客席に座るはるか以前から、私はもう「観客」であったのだ。島に上陸すると、そこには恒例の屋台村と、丸太で組んだ巨大な劇場があった。あたかも、「劇場」そのものが船となって、船のように、その場所に運ばれてきたかのようであった。

それに比べると、ソノノチの「風景演劇」は、少し違う体験だった。たしかにバスに揺られる頃、私はフェリーで犬島に運ばれていた時と同じように「観客」に変貌しつつあった。だが、いざ、現地についてみると、大きく違う。そこには、「劇場」はない。ただ、ごく普通の「風景」だけが、圧倒的にそこにあるのだ。

原泉地区は、掛川駅からバスで約 30 分の山間部にある。山間の、やや開けた集落の農地跡で、1 時間に満たないこの上演は行われた。簡素な椅子などが置かれているだけで、目の前には山々が、傍らには河原が、そして何よりも、その土地に住んでいる人たちの暮らしが、おだやかに私たちを取り囲んでいる。やがて、遠くの道路の向こうから、あるいは近くの古民家の方角から、3 人のパフォーマーが、ゆっくりした足取りで、「舞台」へとやってくる。3 人は、ほとんど交わることなく、おのおのに固有の時間を、そのような風景とともにすごし、たたずんでいる。白と赤の、やや神職を思わせないでもない衣装がなければ、3 人の振る舞いは、ほとんど風景に溶け込んで「見えなくなって」しまうだろう。

演出の中谷和代は、あたかも白いキャンバスに風景画を描くように、風景のなかに俳優たちを存在させる。俳優たちのゆるやかな、意味性の希薄な動きや軌跡は、ちょうどキャンバスに風景画を描くときの自由な絵筆の、その筆先の動きをも連想させる。実際、「舞台」——といっても、そこは何もない農地のような場所——の片隅には、現実の風景を描いた風景

画がイーゼルに飾られている。いつ始まってよく、どこで終わってもよい時間が、風のように、その場に漂って消えていく。客席の多くは、地元に住む人々で占められていたように見えた。

この「出会い」を、私たちは何と名付ければよいのだろうか。

そのことを考える上で、この作品が、「HARAIZUMI ART DAYS! 2021——相互作用」（10月14日－11月28日）の参加作品であることは重要である。グラフィックデザイナーの羽鳥祐子を中心となって立ち上げたこのイベントは、いわゆる国際アートフェスティバルとは一線を画し、何よりもアーティストがこの場にレジデンスして創作のプロセスを構築することを第一の目的に掲げているところに特徴がある。たとえば、越後妻有や瀬戸内のように、国内外の観客が多数訪れることで、地元の風景が祝祭的に変貌するようなフェスティバルではそもそもないのだ。だからこそ、風景は、そこに暮らしている住民の暮らしをそのままたえつつ、当たり前のように、そこにある。その当たり前さこそが、圧倒的な何かでもある。

だからこそ、本作との出会いは、私にとって、きわめて珍しい体験であった。掛川駅からバスに乗ったとき、たしかに私は、維新派の野外劇場を訪れたときと同じように、「（劇場の）観客」へと変容しかけていた。だが、いざ現地に到着し、周囲を散策し、作品を体験しおえた頃には、「私は観客である」という意識は、すでにほぼ消滅していたのである。

だとすれば、ここにいる私は、いったい何者なのか。——おそらく私は観客ではなく、私自身が風景の一部と化していたのではなかったのか。風景に、はたして観客は存在しうるのか。さらにいえば、「風景演劇」に、はたして「演劇」は存在しうるのか。

たぶん、その是非はひとまずおき、そこに演劇など「ほとんど存在していなかった」のだ、と考えるべきなのだと、私は思う。ただ、風が通り過ぎた。その風を、私たちはほとんど演劇と呼ぶ必要はない。それでも一瞬、「演劇のようなもの」が通り過ぎたようにも思える。いまの私にとって、確実にいえることは、2020年に京都芸術センターという屋内劇場で見たソノノチの「風景演劇」シリーズの第一作（『たちまちの流（ながれ）』）とは、まったく違う質の体験があった、ということである。風景のなかで、もはや、ほとんど「気配」のようなものへと接近しつつある何かを「演劇」と呼べるのかどうか。そこにあったのは、ほぼそんな「問い」であったように思われる。

9. 上演記録

▼観覧者数

延べ 188 名

11月20日(土) 合計 92名

(1回目: 36名/2回目: 56名)

11月21日(日) 合計 96名

(3回目: 68人/4回目: 28人)

▼『はらいずみ もやい』鑑賞者の声

昨年もでしたが、今年もたいへん良いものを見せていただき、ありがとうございました。

太陽の日没を照明として利用する発想や、シャボン玉が飛ぶ方向が自然の風で飛んできて視界に入るところなど、自然を組み込んだ演出にただただ舌を巻きました。

非日常と日常がシームレスな感じで、他では見られないものが見られたという満足感がすごくありました。

――

ゆったりしていた時間の中で息子はすやすや夢の中でした。

日常が非日常になる境目が溶けてなくなる感じが素敵です。

今年もソノノチさんの演目を見ることができて良かったです。ありがとうございました。

いつか勝間田でもやりたい思いがフツフツしています。

――

背景の山がとてもきれいな形で、

演者の方の動きと相乗効果のような美しい眺めでした。音楽もいい味わいでした。たまに通る車や、遠くの人声も舞台装置のように感じられる体験でした。ありがとうございました。

――

風景演劇は初めてでしたが、時間や天候、感激する場所によって見え方が全く変わってきて、観る度に色んな印象や解釈を感じてとても面白かったです。

土曜日はとても素晴らしい演目をまた拝見させて頂きました。ロケーションの使い方にセンスを感じられ、2回目ですがソノノチらしさを少し理解したかなと思いました。

上演中はどくとくの雰囲気があつた場を覆い、これは何だろうかとずっと感じながら観ていました。まだ言語化できないのですが、反芻しながら考えて見たいと思います。

今日は素晴らしい作品の発表、おめでとうございます！

掛川まで来て観にきて良かったなあと思える作品でした！

初めて観る、繊細でやさしく、調和からあらゆる表現が派生したパフォーマンスで、様々な感情と共に楽しみました！！

素晴らしい体験をありがとうございました！



10. 「風景演劇」プロジェクトとは

▼「風景演劇」について

「風景演劇」とはソノノチが近年つくりあげてきた独自の上演様式である。言葉の定義として「景色」は主に自然の要素のみで構成されたものを指すことが多いのに対し、「風景」は主観的（私的）であることに加え自然の中に街並みや人の営みが入ったものを指すと言われている。ソノノチはこの風景の主観性に注目し、鑑賞者が人物（パフォーマー）だけでなく自然、そして建物などの人工物も含めた風景を眺めるように鑑賞できるよう、視野を開き、風景に馴染む作品を制作し、風景の中で上演してきた。

鑑賞者は風景演劇を通してその風景がその瞬間その場所にしかないという事実（風景の唯一性）にふれ、風景が立ち上がる瞬間に立ち会い、それを構成するあらゆるものと居合わせることになる。この経験は鑑賞者自身の唯一性への気づきと「自分らしい時間の流れ」の回復につながることを期待されている。

▼上演映像

『風景によせて 2020』 上演映像：

望遠版



ダイジェスト版



『風景によせて 2021』 上演映像：

風景での上演映像



▼これまでの『風景によせて』

『風景によせて 2020』

(「原泉アートデイズ! 2020 ～不完全性～」内で上演)



上演場所：静岡県掛川市萩間の集落一帯
(旧原泉第2製茶工場近くの茶畑付近)

上演日：2020年
10月17日(土)・10月18日(日)
11月14日(土)・11月15日(日)

上演時間(各15分間)
11:55～「さんさん ぼわぼわ ぐう」
12:55～「とととと ちゃかしゃか ふう」
15:00～「ぼそぼそ ポソーサリィ」
15:30～「ふぁ～」(4日とも同内容)

『風景によせて 2021』



上演場所：旧質美小学校(質美笑楽講)
(京都府船井郡京丹波町質美上野43)
中庭、および小学校の外に広がる風景

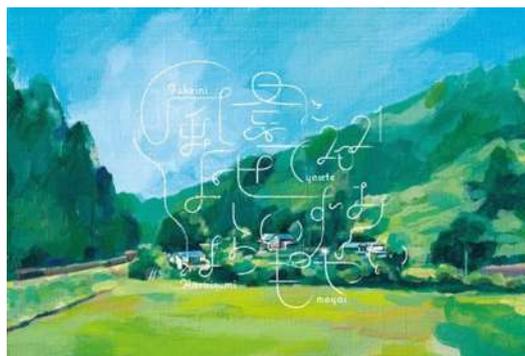
上演日：2021年2月27日(土)・28日(日)

上演時間(各15分)：
14:30～(中庭パフォーマンス)
15:30～(中庭パフォーマンス)
16:30～(屋外パフォーマンス)
(両日とも同内容)

詳しくは「『風景によせて 2020-2021』レポート」をご覧ください(QRコード)



▼『はらいずみ もやい』基本情報



『風景によせて 2021 はらいずみ もやい』

日時：2021年11月20日（土）、21日（日）

各日 ①11:45-／②15:30- 開演（上演時間約30分間）

場所：泉公会堂付近（静岡県掛川市黒俣62周辺）

クリエイションメンバー：

構成・演出：中谷和代／俳優：藤原美保、芦谷康介（サファリ・P）、岡田眞太郎（劇団トム論）

音楽・演奏：瀬乃一郎（廃墟文藝部）／絵画制作：森岡りえ子

美術：下寺孝典（TAIYA）、藏園悠介／演出部：neco（劇団三毛猫座）／衣装：たかつかな（何色何番）／

テクニカル：脇田友（スピカ）／宣伝美術：ほっかいゆ り め こ／アーカイブ：柴田惇朗、中谷利明

制作部：渡邊裕史、小寺春翔、藤田みのり

主催：ソノノチ、原泉アートプロジェクト

協力：一般社団法人フリンジシアターアソシエーション、日向花愛、RiCO

Supported by KAIKA 芸術文化振興基金助成事業

※「HARAIZUMI ART DAYS! 2021 ～相互作用～」内で上演

▼観覧者数

延べ188名

11月20日（土） 合計92名

（1回目：36名／2回目：56名）

11月21日（日） 合計96名

（3回目：68人／4回目：28人）

11. ソノチとは



京都を拠点とするパフォーマンス・アートグループ。2013年1月より活動を開始。ユニット名は、「その後（のち）、観た人を幸せな心地にする作品をつくる」という創作のコンセプトにちなんでいる。近年は、空間そのものを作品として捉えるインスタレーションの手法を用い、劇場だけでなく、ギャラリーやカフェ等での上演を行ったり、絵画や音楽など、他ジャンルのアーティストとのコラボレーションも行う。主なメンバーは、中谷和代（演出家・劇作家）、藤原美保（俳優）、渡邊裕史（制作）。



中谷和代

1985年生まれ。演出家、劇作家、俳優。ソノチ代表。

ソノチの本公演のほか、ミュージカル、市民劇、音楽コンサートなどの演出も手がける。劇作の他にはワークショップデザイナー、イベントディレクターとして活動。2012年頃から演劇教育に興味をもち、演劇ワークショップの効果測定プロジェクトへ参画。ほかにも文化庁、文科省の学校派遣事業や、高校・大学の講師業などを通して、人材育成に取り組む。2014年～2020年 NPO 法人京都舞台芸術協会理事。現在、日本演出家協会会員／日本劇作家協会会員。